

資料4

第1期第7回中野区子どもの権利委員会 2023.5.19(金)

子どもの意見を尊重するために おとなが知っておくべきこと

—ユニセフ「子どもにやさしいまち」づくり関連文書から—

内田 塔子(東洋大学)

自己の意見を言いにくい子ども(若者):

- おとなから評価されることへの「恐れ」
- おとなへ異論を述べることへのマイナスイメージ(低評価)
→おとなの意見に同調する「安全策」を取りがち・忖度
- 意見を言うことへの「あきらめ」(言っても何も変わらない)
- 自分に保障されてしかるべき権利を知らないために、権利侵害に無自覚、意見なし

子ども参加の多様な方法

—自治体子ども政策へ子どもの意見を反映していくために—

【子ども参加の異なる3レベル】

A おとなからの諮問型参加

おとなが、子どもの生活を理解し子どもについてよく認識したうえでプログラムを計画するために、子どもに意見を求める形の子ども参加で、コミュニティ内の多くの子どもに到達でき、おとなにとって最も関心の高いことについて明らかにするのに利用でき、重要問題の地図を作る第一歩を提供してくれる。このタイプの子ども参加は、おとな主導でおとなによって管理されたアプローチを含むものである。

B おとなと子どもの共同型参加

このタイプの参加も、通常おとな主導になるが、パートナーとして子どもと一緒に取り組むことを含み、子どもをエンパワーすることにもなる。ある期間にわたって継続することで、子どもによる自立した行動が増えてくると思われる。

C 子ども主導の参加

このタイプでは、子どもには、自らが考える行動を始め、アドボカシーを実行するスペースと機会が提供されており、おとなから提案された考えやプロジェクトに対応するのではなく、子どもにとって最も大事な、取り組みたい課題を見つけ出すために、子どもによる体制・組織づくりをサポートされている。この場合おとなは指導者ではなくファシリテーターとして関わる。

(UNICEF(2017) "UNICEF Child Friendly Cities and Communities Initiative – Toolkit for National Committees", pp.54-5, Chapter 5.3)

子ども参加の具体的手法

- ①調査に回答する
- ②調査をデザインして実行する
- ③ピアエデュケーションやカウンセリングを行う
- ④学校協議会を運営する
- ⑤地域のユース協議会や議会に参加する
- ⑥地域のニーズ地図をつくるために、ソーシャルメディアを使う

差別をなくす・暴力を許さないキャンペーンの実施ために、ソーシャルメディアを使う、情報を広めるために、ソーシャルメディアを使う

- ⑦地域のサービス(例えば、健康サービス、住居、図書館、スポーツ施設等)を監査する
- ⑧政策に影響を与える
- ⑨地域サービスの運営委員会の一員になる
- ⑩地域サービスの発展と実施に貢献する
- ⑪CFCIのマネジメントに参加する
- ⑫国レベル・地方レベルの子ども参加協議会の会議を発展させる
- ⑬子ども参加協議会間のネットワーキングや子ども参加運動を発展させる

子ども参加の進め方

1. 子どもの参加について協議会で共有されている従来の専門知識を活用したり、子どもとどうやって関わっていくかをよく経験的に理解している地域の組織とともに活動したりする
2. 子どもに対して参加する権利のことや、どうやって子どもが地域を変化させることに貢献できるかということについての意識啓発活動を実行する
3. CFCになることを目指した計画があることを子どもたちに知らせる地域協議会への参加を子どもに要請するとともに、自発的に関わる子どもを見つけだすことを要請する
4. 計画会議に参加するボランティアの子どもを選んでほしいと学校を通じて子どもに求める
5. 子どもたちは何が変わったらいいと思っているかを調査することを学校協議会に依頼する。子どもたちがどのように地域の決定に参加したいのか、例えば定期的に会議を開く協議会に参加したいのか、プロジェクトごとに参加したいのかを調べる
6. 提案を解説してシェアするために、地域の子ども協議会の子どもたちと話し合う
7. 地域の子どもたちを引き込むための計画を進展させるために、地域の子ども協議会と一緒に活動する
8. すべての地域の学校と関係を築くために、地域の協議会と関わる
9. 民主的なフォーラムの環境が整っていない場合には、
 - ・地域に子ども協議会を設立するために支援者を探す
 - ・教育委員会と活動し、可能なところでは先生に学校協議会の導入例を見せる。これは学校における子どもの権利教育に取り組むユニセフと協力して取り組むことができる
10. 地域の子どもにとって何が重大な問題か、地域の子どもは何が変わったらいいと思っているのか、どのように参加したいかを探るために、ソーシャルメディアを使う

(UNICEF Child Friendly Cities and Communities Initiative – Toolkit for National Committees, pp.57-8, Chapter 5.5 How can you reach out to children?)

子ども参加の質を確保する9つの条件

①透明性があり、子どもにその参加活動の範囲・目的・効果などについての情報を与えるものであること

子どもには、意見を自由に言えるように、また、子どもの意見がしかるべく考慮されるように、子どもの権利についてのすべての・利用できる・多様性への感覚と年齢に適した情報が与えられなければならない。その情報は、子どもに対して、この参加がどのように行われ、その範囲・目的・将来的な効果についても伝えるものでなければならない。

②子どもの自発性によるものであること、辞めるのも自由であること

子どもの意思に反して強制して意見を言わせてはならないし、いつのタイミングでも関わりをやめていいということを知らせなければならない。

③子どもの意見を尊重すること

子どもの意見は尊重して扱われなければならないし、アイデアや活動を始める機会を与えられなければならない。子どもと活動するおとなは、例えば子どもが家族・学校・文化・労働環境に貢献するような子ども参加のよい実践例に基づいて進め、尊重し、認めるべきである。

④子ども参加は、子どもが個々に持っている知識や情報・洞察力を生かせるものでなければならない(例えば、自分の生活・コミュニティ・自身に影響を及ぼす課題について):関連性

現実の子どもの生活に関わる課題に対して子どもが意見を言えて、彼らの能力やスキルや知識を活用できる機会がなければならない。子ども参加は、子どもの個々の知識 — 子どもが自分の生活やコミュニティや自身に影響を及ぼす課題について持っている情報や洞察力を生かすものでなければならない。

(次へ続く)

子ども参加の質を確保する9つの条件

⑤子どもにやさしい環境と方法でファシリテートされること

子どもと活動する際のやり方は、子どもの能力に合わせるものでなければならない。子どもが十分に準備ができ、自分の意見を提供できる機会と自信を持てるような、十分な時間とリソースが活用できるようにしておかなければならない。子どもは年齢や能力に応じて、それぞれ違うサポートが必要になるし、様々な形態の関わり方が必要になる。

⑥参加する子どもに偏りがないこと: 包括性

子どもの参加は、包括的で、差別がなく、周縁化された子どもが関与する機会を与えられるものでなければならない。子どもたちは、同種のグループではなく、どの領域に関する差別もなく、すべての子どもに平等に機会が与えられる必要がある。子ども参加は、文化的に、すべてのコミュニティの子どもに敏感である必要がある。

⑦おとなからのトレーニングによって子ども参加のスキルをサポートされること

おとなは、準備・スキル・子ども参加を効果的にファシリテートするサポートが必要である。例えば、おとなには、子どもと一緒に活動し聞くスキルを与えるサポートが必要である。おとなの能力の発達に応じて、子どもを効果的に引き込めるようになる。

(次へ続く)

子ども参加の質を確保する9つの条件

⑧子どもが参加したことにより危険な目に遭わないようにおとながリスク管理をすること

意見表明がリスクを伴う場合もありうる。おとなは、一緒に活動する子どもたちに対して責任を負っている。おとなは、子どもが暴力・搾取・その他子どもが参加したことで生じる悪い結果のリスクを最小限にする注意を事前にしなければならない。適切に保護するために必要な行動として、明快な子ども保護戦略を作成することがあげられる。子どもは、守られる権利があることを知り、必要なときにどこに助けを求めればいいのかを知らされなければならない。

⑨子どもたちの意見がどのように理解され、子どもたちの参加がどのように結果に影響を及ぼしたかを子どもに説明すること:説明する義務

子どもたちの意見がどのように解釈され、使われるかを子どもに知らせなければならない。また必要なら、調査結果の分析に意義を申し立てたり、影響を及ぼしたりする機会を子どもに提供されなければならない。子どももまた、自分たちの参加がどのように結果に影響を及ぼしたかについて、明快なフィードバックを得る権利があるのである。

UNICEF Child Friendly Cities and Communities Initiative – Toolkit for National Committees,

“Chapter 5.6 What are the basic quality requirements for participation?” (pp.58-9)

子ども参加成功のための配慮

1. どのイニシアティブにおいても、最初の段階から子どもが関与すること
2. 子どもには、トレーニングとおとなからの継続したサポートが必要であることを認識すること
3. おとなにも必要なトレーニングをすること
4. 親や子どもの世話をする人に、可能な限り初期段階から子ども参加に関与し、子ども参加を理解・支援してもらうように働きかけること
5. すべての子どもに参加を促す手を差し伸べること
6. すべてのレベルにおいて、子ども参加を制度化すること
7. 日常的な参加を促進すること
8. 子ども参加を支援することのできるおとながいること、会議費用や交通費・コミュニケーション・軽食・会議のための施設にかかる費用等の予算があること
9. 子ども参加は権利であって義務ではないことを忘れないこと
10. 楽しくやること(子どもがリラックスできる場所で、休憩を多くとり、長時間の議論で疲労した時は、体操やストレッチを入れたり、軽食・スナック・ジュースを用意したりする等)

UNICEF Child Friendly Cities and Communities Initiative – Toolkit for National Committees,
"Chapter 5.7 Learning from practice" (pp.59-63)

【グループディスカッションに必要なもの】

可動式の机と椅子、ステッカー、クレヨン、マジック、模造紙、付箋、食べ物・飲み物、参加者への謝礼としての鉛筆等、カメラなど

The Innocenti Research Centre of UNICEF and Childwatch International (2011),
"A Child Friendly Community Self-Assessment Tool for Children"

求められるおとなの意識転換

スウェーデンの実践に学ぶ

『幼児から民主主義』より

(エリザベス・アルネール、ソルヴェイ・ソーレマン、伊集守直・光橋翠訳 新評論2021)

ケース① (『幼児から民主主義』37ページより)



Toyo University supports the Sustainable Development Goals

【2人の子どもが、「中での遊びを続けたい」と意見表明した時の様子】

(分析・省察)

- 2人の子どもは、中での遊びを続けることが認められたことにより、遊ぶ権利だけでなく、自分たちの空想やひらめき、イニシアティブや責任を発展させる機会が与えられた。
- 先生は、この時、決まったルールに従い、中での遊びをやめさせ、一緒に外に連れていくことで、子どもたちが上述のような機会を得られなくなってしまうことに鑑み、子どもたちを信頼して彼らの提案を受け入れた。
- その結果、子どもたちは自分たちの意見が受け止められ、自分たちが信頼されていると感じることができ、自分たちがこの場への影響力をもち、自分たちの考えを深めることができた上に、自分の行動やお互いに対して責任をもつことができた。

子どもたちは服を着て、外に出ることになっています。全員が、後片づけをするように言われています。五歳になる二人の男の子は、ひそひそ話をしており、なかなか着替えをしません。先生が二人に急ぐように言いますが、まだひそひそと何かを話しているようです。二人は何を話しているんだろう、と先生は考えます。それから二人が先生のところにやって来て、お願いするような声で「中に残って遊んでいい？」と尋ねました。午前中は外に出ると決まっていますので、先生はきっぱりと断りました。男の子たちはがっかりして、椅子に座り込んでしまいました。

急に、二人をかわいそうに思った先生は、「自分たちだけで中にいられる？」と尋ねました。

「うん、遊び終わったら片づけもできるよ」と、二人は急にうれしそうに答えました。

「じゃあ、いいわよ」と、先生は要求を受け入れました。

二人は大喜びして、自ら進んでこの状況に対する責任を取るようになったのです。これについては、午前中の遊び時間が終わるときにはつきりと分かりました。

「もし、この機会を二人に与えていなかったらどうなっていたらどうか……」と、先生は考えました。

ケース②(『幼児から民主主義』71-72ページより)

【子どもがイニシアティブを発揮できるように先生が手助けした時の様子】

(分析・省察)

- 先生は「今、やりたいことができるとしたら何をしたい？」と尋ねることで、子どもがイニシアティブを発揮する活動のヒントを子どもにもらうことができた。
- 他の先生が、おやつの時間なので遊びをやめて後片付けをするように伝えている場面で、このまま作業を続け、完成したら飛行船を外で飛ばしたいという子どもたちの思いを尊重し、他の先生を説得し、子どもの思いを実現する支援を行った。
- 子どもと先生が互いに助け合い、活発な相互作用が生まれたことで、子どもの主体的な学びの場を実現することができた。

就学前学校の子どもたちが、ちょうど休憩をしていました。一三人の子どもたちが、一つの大きなテーブルに着いています。彼らは、パズルをしたり、本を読んだり、静かな遊びをしたりしていました。みんな、ちょっと疲れて、ぼんやりとしているように見えます。そこに一人の先生が入ってきて、子どもたちに声をかけました。彼女は子どもたちの消極的な様子を見て、テーブルに着いてから隣に座っている男の子に明るく話しかけてみました。

「今、やりたいことができるとしたら、何をしたい？」

男の子は、ちょっと疲れた様子で答えます。

「おうちでパパとつくってる飛行船をつくりたいな」

先生はその答えにヒントをもらい、彼に尋ねました。

「飛行船のつくり方を知ってるの？」

「うん」と男の子は答えました。「知ってるよ。見せてあげようか」

「うん、見たいな。面白そうね」と先生が答えました。

男の子が、飛行船づくりの準備をはじめました。材料を持ってきて、ほかの子どもたちも誘います。先生は座ったまま、彼ののことを見えています。

飛行船づくりが進むなか、子どもたちの間でいろいろな遊びが展開していききました。少しずつ飛行船が完成に近づくと、先生は子どもたちに、飛行船を外で飛ばしてみようと約束しました。そこへ別の先生が部屋に入ってきて、手を叩きながら大きな声で言いました。

「じゃあ、お片づけして！ おやつの時間よ」

「やだー」と子どもたちが返しました。

すでにいた先生が、「飛行船が完成したら外で飛ばすことにしている」と同僚の先生に伝えました。先生が同僚を説得して、無事に子どもたちは外で飛行船を飛ばして遊ぶことができました。

この日の午後は、子どもと大人にとって新しい学びのあるとても楽しい経験となりました。

ケースから理解できること

- おとな(教師)には長年の経験があるため、子どもとの間にどうしても上下関係が存在する。
- 子どもが「やってみたい」「まだ続けたい」という気持ちがあっても、おとな(教師)がそれを認める意識を持たない限り、認めることで生み出される意義を認識していない限り、子どもたちは、日常の活動のなかで、自己の権利を行使できる機会を持つことはできない。

ケース①

- 「子どもたちは、本当に必要だと感じたときには、積極的に能力や勇気、そして行動力を見せる」(76 ページ)
- 「子どもには、責任をもつ能力があり、実際にしっかり責任を果たすことができる」(76 ページ)
- 「子どもは責任がとれないとか、子どもにイニシアティブをとらせる余地を与えたら手に負えなくなってしまふといったことを考える必要はありません」(76 ページ)

ケース②

- 子どもは、学びの場を共につくりあげる主体・パートナーである。



- これまで、子どもを思うあまりに、**子どもが失敗しないように**、アドバイスと称して、子どもの自由な発想や思い・考えを聞かずに、先回りして、手助けをしたり、おとなの考えを伝えたりしていなかったか？
- それは、子どもが思いや考えを表現する機会を奪ってしまっていたことにならないか？
- ついおとなに余裕がないがために、**時間**をかけて子どもの思いや考えを聞けなかったこと、遮ってしまったことがなかったか？

おとなが意識的・無意識的に設けている
「枠」

おとなの想定を超えた子ども意見への対応

子どもの権利への理解がこれからの人
との対話

「権利を教えるとわがまま・身勝手になる」

「権利と義務はセットだ」

子どもの意見の聴き方

- 前提を覆す意見にも耳を傾ける。頭ごなしに否定をしない。
- おとなが考え付かなかったようなアイデアに対して、否定せず受け止める柔軟性
- 聞いた子どもの意見に優劣をつけたり、大人の意見に合致する意見だけを取り上げたり、逆に大人の意見と反対の意見を見無視したりすると、子どもは意見を言わなくなる。
- あらかじめ正解を用意しない。
- 子どもは未熟である。おとなが「正しい道」に導いてやらなければ道を誤るという固定観念を捨てる。大人の方が先の見通しもたち、知識量も多いが、大人の役割は、子どもの忖度なしの意見を受け止めたうえで(否定しない)、子どもが自己決定していくことをサポートする役割(サポートするとは、子どもに質問された際、子どもが判断をするうえで有益な情報を提供する、教師の個人的意見も求められたら話す等)。
- おとなの意見に関わらず、子どもが忖度せずに自由に意見を言うようになるまで、おとなが聞いて肯定することに専念する時間が必要な場合もある
- おとなが子どもの意見を聞いた後、子どもの意見をどのように扱うかが重要
- 子どもの最善の利益の保障、「子どもの最善」をどう決めるか。子どもの意見のいいなりになることではない。
- 子どもにとっての最善の利益を保障するということは、子ども自身の納得感が必要不可欠。子どもの意見に対して、おとなが違う意見を言う場合は、子どもの納得の得られる理由を子どもにわかりやすく説明する。
- 「子どもにとってよかれ」という思いが強いと、教師の意見を押し付けてしまい(「こちらの方がいい」)、知らず知らずのうちに子どもの自主性や主体性を制限し、いつしか「教師の言われた通りに選択・行動する」子どもに育ててしまう。子どもにとっての最善の利益は、何も成功することだけではない。結果的に失敗しても、自分の考え通りに実行する経験、うまくいかなかったときに仲間と協力して修正して再チャレンジする経験、乗り越える経験が重要になってくる。考える力・生きる力が身に着く。
- 失敗や試行錯誤も子どもの成長に重要な経験と考えて、子どもの意見を尊重して受け入れる姿勢も重要。失敗させたくない、成功させたいと先生自身が考えていると、子どもの意見を認めにくくなる。

子どもの意見の聴き方(順不同)

- なぜ、意見がでてこないのか、子どもに聞いてみることが重要。
- なぜ手が上がらないのか、上げにくい雰囲気、上げにくい理由がある可能性をよく考慮せずに、子どもを不真面目・意欲なしとマイナスに捉えがち。
- 子どもの意見を聞くことは、子どもの言いなりになることではない。
- 私は子どもの意見を聞いています。といっている、結論出すのは先生という例は多い。子どもが意見を出しても、決定するのは先生、という例多い。これらは、「言うだけか」と子どもが落胆し、やる気をなくす。考えることを辞めていく。どうせいっても無駄。意欲の低下を招く。子どもは自分の意見が生かされたという体験がなかったら、権利行使をしなくなる。

.....